

「大学での学びと経験」を担当して

基盤教育院 鳥井 康熙

主な授業活動

2007年から「大学での学びと経験」を担当している。本節では主な授業活動を紹介したい。

「名刺交換会」

事前に手作りの名刺をクラスの人数分作成することを宿題に出し、授業中に「名刺交換会」を行う。名刺の中身は学生が決める。活動の目的はお互いを知ることである。学生の感想には次のようなものがある。「初対面の人と話す大変さをあらためて感じた。相手の名前に関心を持つこと、笑顔で接すること、積極的になることが重要だと感じた。」「自分が作った名刺を相手がほめてくれてうれしかった」など素直に嬉しさを表現している意見もあった。また、「自分のことばかりを話すのではなく相手の話を聞くことの大切さが分かった」という意見もあった。

「上級生からのメッセージ」

事前の授業で「上級生に聞いてみたいこと」を聞き、その質問に沿って、上級生（3～4年生）数名に回答してもらう。内容は、大学生活の過ごし方、授業の時間割の組み方、将来に向けてなど多岐にわたる。上級生と知り合う機会が普段あまりないため、参考になったという意見が多かった。『上級生の言葉で印象に残っているのは、「授業、バイト、サークルの両立は難しいからバランスを考えたほうがよい」という言葉である。今までは授業を聞くために大学に来ていた。もちろん出席することは大事だが、大学は授業以外にもたくさん学ぶことがある。大学はあらためて自由に学ぶ場所だと思った。自由を感じ始めたら、勉強をしなくてもよかったと感じるようになった。上級生のアドバイスどおり、バランスを保ちながら授業を受けるようになり、姿勢が変わってきたと感じるようになった。』という感想があった。他には、「就職活動のために、早め早めの準備が必要だと思いました。」という感想があった。

「大学での学習に必要な考える力・書く力」

レポートの書き方、引用の仕方、図書館での検索の仕方などを学ぶ。レポートの基本構成を学ぶことで、2年次以降もそのスキルが使えることを目指している。レポート作成に

あたって必要な知識を伝える。その後、図書館の方に来ていただき蔵書検索の仕方を説明していただく。図書館の本・雑誌を実際に借りてきて、資料を参考にレポートを作成する。テーマは教育に関するものに指定した。図書館が持っている資源を学生が少しでも使えるようになってほしいと感じた。

「自分がやりたいことある？ - 将来を見つめる」

映画「耳をすませば」は、中学校三年生を主人公に恋愛や将来の夢について描いた作品である。作品から現在の自分と照らし合わせて考えて見てもらった。

「主人公が中学三年生という設定であったが、大学生が見ても十分参考になる。」

「将来の夢も決まらず、自分のやりたいことも分からない私にとって、主人公の雫はまるで自分のようだった。やりたいことも決まっていなのに何かやらなければいけないという気持ちだけが先に進んでしまって、行き詰まったことがあった。でも、雫がそうだったように、とりあえず本気で何かに取り組んでみるのが大切だと思った。」

「興味があっても手をつけずにいるもの、いつでもできるからと放置していたものをもう一度見直して何かやってみようと思った。」

「今までは、普通に大学に行って授業を聞いていましたが、映画を見てから、一つ一つを前よりもちゃんと考えて、自分にとって将来にどんな影響があるか思うようになりました。自分は本当に何がしたいのか、何に興味があって、何が苦手なのか見つめなおすことができたと思います。」「聖司のように夢を追いかける向上心が自分にも必要だと思いました。聖司のように夢に向かって真っすぐにつき進める人になろうと思いました。」

「中学生・高校生の頃、私は将来こうなるだろうと思っていました。すごく楽しみだったし早く大人になりたいとも思っていました。いざ大学生になってみると、不安の方が大きい。雫や聖司のように夢ばかりを追いかけていいのかと考えた。しかし、彼らが必死で一つ一つこなしていくのを見て、私も自分のやりたい事を追いつけていこうと思いました。」

「授業内で観た時は、主人公と私を重ね合わせて観ることができ、将来をあらためて考えた。視点を変えて観ることで自分の経験と重ねることができた。物語の途中にも関わらず自分のことを考えることができたことが学びだと思う。」

「桜美林グラフィティ」

桜美林グラフィティでは、まず、5-6名で1グループを作り、グループごとに質問事項の一つを考える。各グループに使い捨てカメラを渡し、教室の外に出て、質問に協力してもらえるか尋ねる。相手は学生、教員など学内の人である。同意が得られれば、A4用紙の紙に質問に対する回答と名前を書いてもらう。回答用紙は本人が持ち、回答が見えるようにして、写真を撮る。事前に、依頼する際の注意点や、無理にお願いをしないよう説明し

た。撮影は授業時間内とし、2回に分けて行った。1グループが撮る枚数は平均30枚である。ただし、授業が1時限目の時は外にいる人が少ないため、昼休みなどを使って撮影の続きを行う場合もある。その後、写真を現像し、模造紙に写真を貼る。写真の貼りつけでは、カラーマジック、はさみ、のりなどの文房具を用意し、質問した時に合わせて聞いた理由を写真から吹き出しのように書くグループもある。ポスターのデザインはグループにより様々である。質問事項の例として、「あなたの幸せは何ですか」「2008年の抱負」「10年後の自分」「大学生活でやりたいこと」などがある。テーマ設定から、写真撮影、ポスター作成、発表と一連の活動を通じて、お互いが協力して取り組むことが求められる。授業を休むと「グループメンバーに迷惑がかかった」と述べた学生もいたことから、授業に参加する大切さを再認識させる機会になった。グループメンバーは男女や学群の比率を考えて構成した。具体的には次のような感想が寄せられた。

「(回答者) 全員がきちんとしたことを書いてくれて、とても気持ち良かった。」「予想していた答えとは違うものがあり、あらためて考えさせられた」などである。ある学生は、『「自分は人見知りであると感じていたことが、そんなことは関係ないのだ。人とのコミュニケーションを取ることはとても大切なことだと気づかせてくれた授業でした。』』と述べ、「この授業をとおして自分自身の考え方が変わり向上することができた。』』とも述べている。「普段知り合う機会が少ない他の学群の友達と関わりが持て、おかげで友人もたくさん作ることができた。その中で私はあまり人見知りしないのだということが分かり、人と話すことが好きなことに気づいたので、将来、このことを生かしていける仕事や夢を探していこうと思います。」

この授業を担当して

この授業を担当して、大学では、高校までの授業と違いクラスの人と接する時間があまりないため、お互いを知る機会が少ないことに気がついた。コミュニケーションの難しさや、人との関わり大切さに気づくのも授業目的の一つである。

大学では共に学ぶ仲間が必要であり、「大学での学びと経験」の授業は学生の学びを支援する役割を担っていると考える。一人で授業を聞いて帰る形式ではなく、他者と共に活動する。お互いを知る上で、最初は手探りであっても徐々にお互いのことが分かっていくというプロセスを経て、学びの仲間を作る。大学にはいろいろな考えの仲間たちがいて、その交流から自分自身を知り、自分の将来を考える機会にもなる。自分が大学生活で出会ってきたことを今後も続けようとする自覚をあらたにする学生もいれば、これからは新しいことに取り組みたいと決意する学生もいる。「大学生活をどう過ごせば充実するのか」、この授業は、こうしたことを考える機会になっていると考える。